Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

原著＜論文＞

遊びにおける幼児の“振り向き”の意味

―3歳児の砂遊びにおける“振り向き”から相互作用への展開事例の検討より―

香曽我部　琢

本研究では，まず，遊びにおいて表れる幼児の“振り向き”という行為に着目し，その“振り向き”の実態を明らかにする。次に，事例をもとに“振り向き”から相互作用へと展開する過程について明らかにすることで，遊びにおける幼児の“振り向き”の意味について分析と論証を行う。その結果，“振り向き”が主に4つの要因によって引き起こされ，3歳児が一人で行う砂遊びにおいて“振り向き”が多く表れることを明らかにした。そして，3歳児の砂遊びの事例から，“振り向き”直後の注視，双方向的な“振り向き”によって幼児同士にその後の相互作用に対する暗黙的な承認が行われることを明らかにした。さらに，その後，幼児は接近することで場を共有し，暗黙的方略で交渉したり，模倣的方略を用いたりすることで相互作用へと至る過程を明らかにした。そして，遊びで表れる幼児の“振り向き”は，その空間にいる幼児や保育者と共に遊びたいという能動的な心理の欲求によって表象されていることを示し，保育者が幼児の“振り向き”を理解することは，その幼児の理解だけでなく，その場においてどの程度の仲間意識，イメージの共有が幼児間に保たれているのか確認する一つの目安になることを示唆した。

キー ワード：“振り向き”，相互作用，3歳児，砂遊び，場の共有

The Meaning of Children's “Head Turn” in Play：A Case Study of 3-Years-Old Children who Progress from “Head Turn” to Interaction in Sand Play

Taku Kousokabe

The purpose of this study is to clarify that a 3-years-old child's head turns during play and that there is a process in which this “Head Turn” leads to interaction with peers. An analysis of the meaning of children's “Head Turn” in play is also included showing that 1) there are four factors for “Head Turn”, and 2) the highest frequency of “Head Turn” is when the 3-years-old child engages in solitary sand play. During play there is a mutual head turn which initiates non-verbal approval of interaction, then progresses to approach, negotiations, and imitation in play and ultimately to elaborate interaction. I suggest that children's “Head Turn” is a useful measure for teachers to guess the consciousness of children during play.

Key Word： “Head Turn”, interaction, 3-years-old, play with sand, sharing the space

---

上越教育大学　幼児教育学・保育内容（表現）

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

1. 研究の目的

身体の動きと仲間関係

森[1]は，砂場の水溜りに集まった3人の子どもが，その水溜りを“跳び越える”という1人の身体の動きをきっかけに，他の2人が跳び始め，遊びが盛り上がった事例を示した。そして，この3人の身体が同じ動きを共有していく姿を，身体の「共振」という言葉を用いて捉え直し，この身体の「共振」によって3人の間に「対人関係的な自己の自己知覚が成立した」ために，この遊びが盛り上がったことを示唆した。塚崎・無藤[2]は，3歳児の“手をつなぐ”，“抱きしめる”といった身体接触の場面に焦点を当て，3歳児が遊んでいるとき互いの身体接触が仲間関係の成立と関連性があることを示した。つまり，遊びにおいて現れる子どもの身体の在り方や動きは，物理的な現象として現れるだけでなく，子どもの心情や興味などの内面の志向性をも含んでおり，その場の雰囲気をつくったり，そこでの人間関係と関連づいたりすることで，遊びそのものを支える要素となるのである[3]。

心情の志向性を示す“振り向き”

本研究で焦点を当てる“振り向き”も，これまでの研究領域において重視されてきた身体の動きの一つである。Fernand[4]は，生後4か月の乳児が母親の話し声（motherese）を判別し，その声に気づき，選好するときの身体の動きとしてその声の方向に“振り向き（Head Turn）”を行うことを明らかにした。その成果をもとにNelsonら[5]は，乳児が特定の方向に“振り向き”を行い，視覚的な注意を向けている間，同じ方向から流れる刺激音（Auditory Stimulation）を聴取していることを実験によって証明した。そして，その成果を用いて視覚的に注意している時間の長短を比較することで，乳児の刺激音に対する選好反応を調べるための実験方法「選好振り向き法（The Head-Turn Preference Procedure for Testing Auditory Perception：HPP）」[注1]を開発した。つまり，乳児期のはやい段階から子どもが見せる“振り向き”は，ただ単に頭や身体を方向転換させるという物理的な動きとしてだけではなく，その子の興味や関心などと結びついており，その子の心情の志向性を表象した行為と考えられるのである。

この“振り向き”という身体の動きは，厳しい統制下にある実験室では多くの研究者によって研究の対象とされてきた。一方，日常的な場面での“振り向き”はこれまで大きく取り上げられることはなかった。しかし，先述してきたように，保育実践において現れる幼児の身体の在り方や動きが，遊びの中で営まれる友達や保育者との相互作用に何らかの影響を与え，その遊びを支える要素の一つとなっていると思われる。そこで，本研究では，幼児の“振り向き”がどのように生み出され，相互作用へどのように影響を与え，展開していくのか，“振り向き”の事例をもとに，その過程を明らかにし，遊びにおける幼児の“振り向き”の意味について分析，論証を行う。

2. 研究の方法

研究方法について検討を行うために事前に観察を実施した（2008年9月25日，30日）。事前観察では，遊びにおける幼児の“振り向き”が突発的，瞬間的，かつ広範囲に表れた。そのため，“振り向き”が表れることを予測することが難しく，それを生み出した要因はもちろん，その後の相互作用への影響や展開についても理解することが困難であることが判明した。そこで，本研究では，はじめに【研究1】として，幼児がどのような状況や要因によって“振り向き”を多く行うのか，その実態を明らかにしようと考えた。そして，その結果をもとに，“振り向き”が多く見られる状況を選定する。次に，【研究2】では，その選定した状況下において，要因に注意しながら幼児の遊びを観察し，幼児の“振り向き”がどのように生み出され，相互作用へ展開していくのか，その過程を明らかにすること

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

で，“振り向き”の意味について分析，論証を行おうと考えた。

（1）事例収集の手続き

【研究1】“振り向き”を何歳児が，どのような場所で，どれくらいの頻度で，どのようなときに行うのか，その実態を調査することを目的とした。そのため，屋外では園庭が見渡せる場所に，屋内では保育室が見渡せる場所にビデオカメラを設置し，定点撮影による事例収集を中心に行った。ビデオカメラでは撮影できない場所をフィールドノートで補足的に記録を行った。

【研究2】幼児の“振り向き”の瞬間とそれ以降の様子だけではなく，その前の幼児同士や保育者との遊びの様子も含めて，相互作用に至るまでの経過を詳細に記述するため，フィールドノートでの記述のみとした。事例を収集する際に感じた不明な点については，担任保育者にインフォーマルなインタビューを行い補足した。

（2）対象と期間

場所は愛知県内の公立保育所で実施した。“振り向き”の要因を特定する必要があったため，少人数の保育所で実施した。

【研究1】2008年10月から2008年11月までの期間で，登園からお片付けまでの1時間30分程度，計6回（晴天時屋外3回，雨天時屋内3回）実施した。3歳児（男5名，女2名），4歳児（男4名，女2名），5歳児（男3名，女5名）合計21名を対象とした。

【研究2】2009年5月から7月まで，登園からお片付けの1時間30分程度，計5回実施した。対象者は3歳児（男5名，女3名）合計8名を対象とした。

（3）分析の手続き

【研究1】で収集した“振り向き”の事例に関しては，幼児が頭部や身体の向きを変えることで，これまでの自分の視界外に視線を移すことで，見る対象を変化させる行為を“振り向き”として定義した。しかし，連続して同じ対象に対して振り向いた場合については，何度“振り向き”を行っても1つとカウントした。そして，その“振り向き”ごとに①“振り向き”を行った幼児の年齢，②場所，③遊びの種類，④一緒にいた人数，⑤何に振り向いたのか，以上5つの項目によって分類し，比較を行うことで，“振り向き”がどのような状況で多く表れるのか明らかにした。

【研究2】で収集した“振り向き”から相互作用へと至る展開過程の事例については，【研究1】の分析結果をもとに，①“振り向き”直前の幼児の様子，②何に注意を向けたのか，③その後の相互作用の様子，以上3つの場面に分けて分析を行った。詳しくは3(2)に記載されている。

3. 結果と考察

（1）“振り向き”の調査結果

“振り向き”の回数

まず，表1では，屋外，屋内での年齢ごとの“振り向き”の回数を示した。合計258回で，屋外では186回，屋内は72回であった。屋内よりも屋外で多かったのは，屋内が物理的に狭い空間で，

表1　年齢と場所

	屋外			屋内			合計
	砂場	グラウンド	遊具	ごっこコーナー	製作コーナー	遊戯室	
3歳児	57 (37.5)	24 (15.8)	31 (20.4)	9 (5.9)	12 (7.9)	19 (12.5)	152
4歳児	24 (35.8)	13 (19.4)	11 (16.4)	10 (14.9)	4 (6.0)	5 (7.5)	67
5歳児	7 (17.9)	15 (38.5)	4 (10.3)	2 (5.1)	6 (15.4)	5 (12.8)	39
	186			72			258

※（　）内の数字は各年齢児の合計を母数とした%。

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

頭部で“振り向き”するまでもなく，顔を上げたり，視線を移動したりするだけで十分であったためと考えられる。屋外の各場所による“振り向き”の回数については，3歳児，4歳児ともに砂場付近での“振り向き”が多く，比率においても3分の1以上が砂場で見られた。これは，砂場では座ったり，しゃがんだりして砂に視線を落とすため頭部を下げる姿勢が多く，近くで声がしたときに，顔を上げたり，視線を移したりするだけはその声を出した幼児を確認できない。そのため，頭部や上半身で“振り向き”，視線を移す動作が必要になるという物理的な条件によると考えられる。

次に，表2に示したように“振り向き”の7割以上が1人で遊んでいるときに見られた。これは，同じ遊びを複数人で行う場合，同じ空間や道具を複数人の幼児が共同して使うため，必然的に仲間と近づくこと，仲間との言葉や行為のやり取りなどの直接的な相互作用が増え，周囲への意識が薄まること，以上2つの理由によって複数人の遊びでは“振り向き”が減少したと考えられる。

要因の分類方法

次に，幼児の“振り向き”を促した要因（表3）についての説明と考察を行う。大分類としては，「i保育者の音声」，「ii幼児の音声」，「iii音」，「iv身体接触」，の主に4つのカテゴリーを用い，不明な事例は「vその他」に分類した。「i保育者の音声」においては，「○○ちゃん」，「ままごとしているお友達」などとその音声が“振り向き”を行った幼児に向けられて発せられたものを「a. 直接的」とし，別な幼児に向けて発せられた音声を「b. 間接的」とした。「ii幼児の音声」においても同様に2つに小分類した。つぎに，物が落ちたり，幼児が物を叩いたり，けったりすることで生み出された音に反応して“振り向き”を行った場合には「iii音」として分類を行った。つぎに，「iv身体接触」では，幼児や保育者がその幼児の注意を自分に向けようと意図を持って肩をたたいたり，手を引っ張ったりすることで“振り向き”が行われた場合は「a. 意図的」へ，偶然にぶつかったり，たまたま側を歩いていった気配などによって“振り向き”が行われたときは「b. 偶発的」へ分類を行った。

各年齢における要因の特徴

4つの要因について，各年齢での回数と比率を表3としてまとめた。まず，5歳児の特徴としては，「○○くん」などの幼児同士の直接的な音声や，手で肩を叩いたり，抱いたりする意図的な身体接触の比率が高く6割を超える。3歳児の事例であるが，塚崎・無藤（2004）が「親和的な人間関係と親和的な身体接触はお互いに作用しあっている」と述べ，人間関係と身体接触には相関関係が存在することを示唆している。5歳児において意図的な身体接触が多く現れることは，すでに良好な人間関係が築かれているためと考えられる。

表2　年齢と人数

	3歳児	4歳児	5歳児	合計
1人	107 (70.4)	52 (77.6)	37 (94.9)	196 (76.0)
2人	42 (27.6)	15 (22.4)	2 (5.1)	59 (22.8)
3人以上	3 (2.0)	0 (0.0)	0 (0.0)	3 (1.2)

※（　）内の数字が%。

表3　年齢と“振り向き”の要因

	i保育者の音声		ii幼児の音声		iii音	iv身体接触		vその他
	a. 直接的	b. 間接的	a. 直接的	b. 間接的		a. 意図的	b. 偶発的	
3歳児	27 (17.8)	28 (18.4)	24 (15.8)	21 (13.8)	31 (20.4)	7 (4.6)	9 (5.9)	5 (3.3)
4歳児	12 (17.9)	5 (7.5)	15 (22.4)	14 (20.9)	8 (11.9)	9 (13.4)	2 (3.0)	2 (3.0)
5歳児	3 (7.7)	2 (5.1)	11 (28.2)	6 (15.4)	2 (5.1)	14 (35.9)	1 (2.6)	0 (0.0)
	42 (16.3)	35 (13.6)	50 (19.4)	41 (15.9)	41 (15.9)	30 (11.6)	12 (4.7)	7 (2.7)

※（　）内の数字が%。

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

4歳児では，保育者の間接的な音声に対する反応が薄くなり，幼児の音声に対する反応が増大し4割を超えた。4歳児になると互いに名前を呼び合い幼児同士の直接的な音声が多くなっていることは，4歳児後期になると「いれて」「いいよ」という定型的な仲間入りルールによる明示的な仲間入りが多くなることを示した先行研究[6]の成果とも一致する。

3歳児については，iからiiiにわたって回数・比率が安定して多い。このことから，3歳児がまわりの友達や保育者の言動すべてに対して，常に感覚を研ぎ澄ませて状況の変化を読み取ろうとしていることが理解できる。次の事例は,周りの状況の変化を読み取ろうと敏感になっている3歳児の心情が理解できる事例である。

事例：声や音が聴こえないときの“振り向き”

Y子がしゃがんで砂場でケーキづくりをしている。バケツに砂を押し詰めて，ひっくり返して，きれいに型を抜こうと繰り返すY子。そのとき，不意に背後にいた保育者が砂場にいた他の子どもをつれて，園舎の奥の方へ歩き始める。園舎の影に入ると，それまで大きく響いていた他の幼児の声が突然聞こえなくなり，歩く音も小さくなる。保育者が歩き始めても,“振り向き”をしなかったY子が，園舎の影に入って音や声が聞こえなくなったとたんに，保育者が行った方向に“振り向き”を行った。しかし，座ったままでは保育者や他の幼児は園舎の影に隠れて見えない。C子は立ち上がって歩き，園舎の裏側に保育者がいるのを確認すると，またもとの場所にしゃがみこんでケーキづくりを始めた。

この事例が特徴的なのは，他の事例では幼児が声や音に気づいて“振り向き”を行っているのに対して，これまであった声や音が急になくなったことに気づいて“振り向き”を行った点にある。この事例から，幼児の“振り向き”がただ単に声や音に刺激を受けて表れる受動的な心情を表象した行為ではなく，視覚や聴覚などの感覚を用いて自分の周りの状況の変化を自ら捉えようとする能動的な心情を表象した行為であることが理解できる。

(2)“振り向き”から相互作用への展開過程

“振り向き”要因による事例収集の理由

つぎに，【研究2】では，【研究1】の結果を踏まえて，遊びの中での“振り向き”から相互作用へと展開していく過程を明らかにすることで，幼児の“振り向き”の意味について分析，論証を行う。そのため，表3に示したように，すでに“振り向き”の後に相互作用することを前提として行われる受動的な“振り向き”，例えばY児がX児といっしょに遊ぼうとするときに，「Xちゃん」と声がけしたり，X児の肩を叩いたりする要因「i，ii a. 直接的」な音声，「iv a. 意図的」な身体接触を要因とする“振り向き”は研究対象から外す。そして，表3において「iii音」,「i，ii b. 間接的」な音声,「iii音」,「iv b. 偶発的な身体接触」の要因に分類した，遊びの中でふいに現れる状況の変化を幼児が能動的に読み取ろうとする“振り向き”を研究の対象と選定することとした。

表3から，先に示した「i，ii b. 間接的」な音声,「iii音」,「iv b. 偶発的な身体接触」の要因による“振り向き”は3歳児が最も多く観察されている。そして，表1，表2から，3歳児が砂場で，1人もしくは2人で遊んでいるとき，多くの“振り向き”が現れることが明らかである。そこで【研究2】では，3歳児が1人，もしくは2人で砂遊びをする場面に焦点を当て，どのようにして“振り向き”が現れ，それから相互作用へと展開する具体的な事例を収集し，分析と論証を行う。

相互作用への展開過程の結果と考察

表4は【研究2】において収集された事例12件を3つの場面に分けて概要を示したものである。以下代表的な事例をもとに，“振り向き”から相互作用への展開過程の特徴について述べる。

(ア)“振り向き”直後の注視

“振り向き”直後に，その要因を生み出した幼児に対して注視を行う姿が8事例で見られた。以下，その事例と考察である。

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

表4　3歳児の砂遊びにおけるエピソード事例の概要

No.	“振り向き”前の様子		要因	振り向きの方向	“振り向き”直後の行為		その後の相互作用の様子
1	シャベルの裏で作った砂山を固めるA子	1人	iii音	A子 ↓ B男	注視 ↓ 模倣	B男がシャベルを寝かせて地表の乾いた土を剝ぎ取るように削る音をじっと見つめるA子。	A子が立ち上がりB男のとなりに座り同じようにシャベルを寝かせて乾いた土を削り取る。削り取った砂を山にふりかけて遊ぶ2人。
2	泥と花びらをなべにいれてシャベルでかき混ぜているB子	1人	i保育者の音声b. 間接的 iii音	B子 ↓↑ C子 双方向	交渉 ↓ 模倣	保育者がC子がビニール袋にいれてつくった色水を見て「わーきれいね。」と言った声に反応して，保育者の方を見るB子。C子が花びらをなべに入れシャベルでかきまわす音に，B子が振り向く。	保育者とC子のところへ歩み寄り，C子の持つ色水の袋を見て触った。それを見て保育者が「袋いる？」とB子に聞く，袋を渡すとC子と一緒に花をつみに行った。
3	スコップで穴を深く掘ろうとするA男	1人	iii音	A男 ↓ 年中児	注視 ↓ 模倣	年中児が山を固めようとスコップを山に打ちつけようとしたが，誤って雨どいにぶつけた音に気づいて振り向くA男。	年中児の近くにやってきて，雨どいに同じようにスコップを当てるA男と年中児。しだいに，スコップを当てるタイミングが合ってくる二人。「せーの」と年中児がタイミングを図り始める。
4	皿に砂をシャベルで盛るC子	1人	ii幼児の音声b. 間接的	C子 ↓ 年長児	注視 ↓ 模倣	年長児がシャベルでふるいの中に砂を入れてかき回しながら，隣の友達に話かけている。その声に気づいて振り向くC子。	年長児の方に身体を向けて一緒に皿に持った砂を年長児と同じようにかき回しはじめる。しばらくすると年長がタンポポの花びらをC子のさらに入れようと「いる？」と聞いた。
5	砂場でソフトビニールの車のコースをつくり，走らせているC男	1人	ii幼児の音声 iv身体接触	C男 ↓↑ D男 双方向	交渉 ↓ 模倣	C男の「ウィーン」という声に振り向くD男。D男がC男のまねをして別のソフトビニールの車を走らせてくる。D男の腕が，C男の背中にぶつかる。D男を見るC男。	C男が，D男が走らせる車の隣に自分の車をおいて「よーいどんしよ」，一緒に車を走らせ始める。
6	砂場のまわりにできた大きな水溜りに手を入れてその感触を楽しむA子	1人	iii音	E男 ↓ A子	注視 ↓ 模倣	E男がなべを持ってきてシャベルでなべに泥水を入れ始める。シャベルとなべがぶつかり合う音に振り向いたA子。	見つめるA子，しばらくするとバケツを持ってきて泥水を入れ始める。その音に気づいて，振り向くE男。自分のなべの泥水をA子のバケツに入れる。
7	なべに砂と草をいれてまぜているB男	1人	i保育者の音声b. 間接的	B男 ↓ D男	注視 ↓ 模倣	D男がスクーターを乗ってやって来て，砂場の隅にそれを置く。保育者の「ここ駐車場にするの？」に振り向くB男。	B男がスクーターを乗って来て，同じように砂場の隅に置く。そこにD男がやって来て，「ここ駐車場だよ」と言って，スクーターに乗ってグラウンドに向かっていく。追いかけるB男。
8	砂場で穴を掘っているA男，とB男水を汲んできては，穴に入れているがなかなかたまらない	2人	ii幼児の音声b. 間接的 iii音	A男 ↓↑ C男 双方向	交渉 ↓ 模倣	ネコ（一輪車）に水を汲んできたC男，それを見たA子とB子が「いっぱいだね」と騒ぐ，その声に振り向くA男。今度はA男がバケツに水を汲んで，穴に入れる。その音に振り向くG男。	A男がC男の傍にバケツを持って来る。ネコに入った水を「ちょうだい」と言う。汲もうとするがなかなか汲めない。A男とC男が一緒に別なネコをとりに行く。水を汲んではA男とB男が掘った穴に水を入れ始める二人。
9	砂山の斜面にといを置いて水を流すB男	1人	iii音	B男 ↓ 年中児	注視 ↓ 模倣	といから流れてきた水が，砂場の隅の低いところに溜まりはじめる。そこに足を入れはじめる年中児水しぶきがあがる。その音に振り向くB男。	年中児の様子を見るB男，年中児に近づき，そっと足を入れ，年中児のようにズボンを引っ張り上げながら足踏みをする。年中児の足ぶみとB男の足ぶみのテンポが合ってくる。
10	カップを使って型抜きをしているB子	1人	ii幼児の音声b. 間接的	B子 ↓ 年長児	注視 ↓ 模倣	別なところでB子と同じようにカップを使って型抜きを始める年長児。机の上でカップをひっくりかえす。その音に振り向くB子。	年長児の様子を見るB子，カップに砂をつめると，年長児がいる机のところにいってひっくりかえす。カップをとるまえに，カップの底をシャベルで叩く年長児。B子のカップの底もたたいて「どうぞ」と言って，B子を見る。
11	砂場の屋根代わりになっている藤の木に登ろうとするD男	1人	ii幼児の音声b. 間接的	D男 ↓ B子	注視 ↓ 模倣	B子が砂場道具を運んでいる。ちょうど砂山の上で座ろうとしたとき砂場道具を落としてしまう。そのときB子が「キャー」と叫ぶ声に振り向くD男。	持っていたペットボトルが砂山を転がっていく。B子が追って拾う。D男が道具箱からペットボトルを持ってきて，砂山の上からペットボトルを転がす。一緒に転がし始めるB子。
12	じょうごに泥水をいれて，出てくる様子を見ているC子	1人	iii音 iii音	C子 ↓↑ E男 双方向	交渉 ↓ 模倣	E男が泥水の入ったバケツをひっくりかえして泥を取ろうとして，バケツの底を足で踏む音に振り返るC子。C子のじょうごもつまり，バケツにじょうごを打ちつける。その音に振り向くE男。	C子が自分のバケツをひっくりかえして，E男と同じように泥を取ろうとする。そして，E男を見て「とれないんだよ」と言う。E男はうなずくと，C子のバケツを何度か足で踏み，バケツの中を確認する。それを繰り返す2人。

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

事例１：白い雪山をつくるＡ子とＢ男

登園するとすぐに砂場に向かって走っていくＡ子，砂場の脇に置かれた砂遊びの道具が入った箱からシャベルを持って砂場の中央に座る。砂場の中央には，昨日の砂遊びで年長さんが掘った穴がちょっと崩れた状態で存在する。そこに座ると同時にシャベルでその穴を掘り始める。しばらく掘っていくうちに年長児が何人か集まり，砂場の端の方に穴を掘り始める。Ａ子はその様子には目もくれず，穴を掘り進めていく。すると穴が深くなると同時にＡ子の右脇に砂の山ができる。するとＡ子はそばにできた砂の山に視線を移し，穴掘りを止めて，その山の斜面をシャベルの背中でポンポンと叩き，山を固めようとする。そして，その土で山を高くしようと，穴の側面を削った土を山の山頂にかけ，その山頂をシャベルの背でたたく。それを何度も繰り返す。

Ａ子がその繰り返しを始めたころ，砂場にやってきたＢ男が，Ａ子の背後にやってきた。そこをシャベルで掘り，その土で山を作り始める。Ａ子と同じようにそれを繰り返すことで山を高くし始める。しかし，しばらくするとＢ男は砂場道具の箱のそばに歩み寄る。そして，その道具箱の中からプリンカップを持って，砂場から少し外れたグラウンドよりの土が乾き，固まったの地表部分を，シャベルを横向きにして薄く削るようにして集めてプリンカップに盛り始める。

ふいに，①Ａ子がＢ男のシャベルで地表を削る音に気づき，その方向に頭部だけを“振り向き”，Ｂ男の姿を確認する。すると今度は上半身をＢ男の方に向けてしばらくじっとその様子を見ている。そして，立ち上がり砂場道具の箱に行く。その箱の中からプリンカップを持って，②Ｂ男の側に座ってＢ男と同じようにシャベルを横に持って地表の土を削り取りはじめる。③Ｂ男がＡ子と視線を合わせて笑顔をみせるが，すぐにまた土を削り始める。削って白く乾燥した部分がなくなると，ちょっと横にずれる。それを繰り返し，削りつづける二人。Ｂ男のプリンカップが満杯になると，Ｂ男はあまった削った土をシャベルで集めて，Ａ子のプリンカップに入れ始める。Ａ子は「ありがと」と言ってまた削り始める。Ｂ男がふいに立ち上がり，自分の作った砂山の頂上にその乾いた砂をふりかけ，シャベルの背で叩き始める。

しばらくすると，Ａ子も自分の作った山に乾いた砂をかける。Ａ子は，その山を指で示して，Ｂ男の方を向いて「雪が降ったんだよ」と言う。Ｂ男はＡ子の白くなった山を見て，「僕のは※※山なんだ」と言うとＡ子はＢ男のそばにやってきた。Ａ子がＢ男の山の白くなった部分をシャベルの背で叩く。Ｂ男は，さっき土を削った場所に戻って土をけ削り始め，砂を集めるとまたそれを山にかける。そして，Ａ子がシャベルでその砂をかけたところをシャベルでたたく。

“振り向き”直後の注視による承認

事例１では，①に示したようにＡ子は，Ｂ男がたてたシャベルを使って乾いた地表を削り取る音を要因として“振り向き”を行っている。Ａ子は初め頭部だけで“振り向き”Ｂ男の様子を確認する。その直後，つづけてＡ子は頭部だけでなくさらに上半身もＢ男の方に向けてその要因となった音を出すＢ男の姿を注視している。このように要因となる音声や音，身体接触が起きた方向に“振り向き”，その要因を生み出した主体者である幼児に対して一定の時間注視する行為は８つの事例で認められている。

野村[7]によれば，誰かを注視する行為とは「他者のからだに触れることが『物理的縄張り』の侵犯を構成するのと同種の現象」であり，見つめる対象に対する刺激や作用である。そして，見つめられる者は「誰かにじっと見つめられていることがわかると，思わず見返すという現象が広く見られる」ことを示し，「見つめられた者が見返す視線は，警戒，不審，警告の身体反応である」と述べている。すなわち，見つめられた者が見つめる者に対して消極的，否定的な意思を持つときには，人はその人を見返すなどなんらかの反応を示すことを示唆しているのである。しかしながら，Ｂ男はなんの反応も見せてはいない。Ａ子はＢ男の視界の範囲におり，距離も２ｍ程度で，Ｂ男はＡ子の後に砂場へと来ており，さらにＡ子は頭部だけでなく，上半身をＢ男に向けて一定の時間見つめていることからも，Ａ子が自分（Ｂ男）を見ていることを

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

B男は十分に認識していると考えられる。もし，B男がA子に対して，自分を見て欲しくないと感じているならば，A子を見返したり，その意思を言葉にしたり，A子に向かって背を向けたりと何らかの反応を示すはずである。B男があえて反応を示さないということは，自分がA子を認めており，この注視の後に自分に対して何らかの関わりを行ってくることを暗黙的に承認していると考えられる。さらに，B男がA子の関わりをこの時点で承認していることは，③のようにA子がB男の傍に来て，動作を模倣したときに見せたB男の好意的な表情からも理解できる。つまり，幼児が“振り向き”の直後に行う注視によって，見つめる幼児と見つめられる幼児との間に，その後の関わりに対して既に暗黙的な承認を成立させると考えられるのである。

（イ）双方向的な“振り向き”と場の共有

これまで“振り向き”の直後，注視を行った事例について考察してきた。次に，注視が行われず交渉へと展開した4事例について，その代表的な事例を通して考察を行う。

事例5：車で競争するC男とD男

C男が1人で砂場にできた山の斜面をソフトビニールの車を「ウィーーー」と声を出しながら走らせている。山の周りを何周かすると，山の頂上に向かって車を上らせ，頂上に差し掛かると「ジャーン」といって車を手から離し，まるで車が山からジャンプするような動きを何度も繰り返している。

しばらくすると，④C男の背後の離れたところにいたD男が振り向き，C男の様子を見る。そしてすぐに立ち上がり，そばに落ちていた車を持って来る。そして，その車を昨日年長さんが温泉ごっこをしたときに水を流したあとにできた浅い溝に沿って車を走らせ，「ウィーーーン」と声を出す。

⑤その声に気づいたC男が，D男の方を振り向くが，少し視線を送っただけで，また山の周りを車をくるくると周回させて，山頂でジャンプすることを繰り返す。それから，C男が3回目のジャンプをしたときの「ジャーーン」と言う声に反応して，⑥今度はD男がC男の方を振り向き，一瞬だけ視線を送るとすぐに自分の車を溝に入れて「ウィーーン」と言って走らせ始める。

D男は溝に沿いつつ，さらに溝を深くしながら車を走らせている。次第に，C男の山に近づいていくD男。⑦D男が近づいてくるのをD男の声や車で溝を掘る音で感じたC男がまたD男の方を振り向くが，視線を送るだけで，また自分の車に視線を戻し，山の周りで車を走らせようと体を移動させようとした。すると，⑧背後まで溝を掘りながら進んできたD男の腕とC男の背中がぶつかり，C男がD男の方を振り向き，D男の姿を見る。するとC男はD男の車の後ろに自分の車を置いてD男の車が進んでいる方向に一緒に車を走らせ，⑨「よーいどんしよ」と言う。そして，自分が作った山を周回するコースを，D男を先導するように車を走らせる。D男もC男の後に着きながら車を動かせている。3回山頂をジャンプした後，D男は山の周回コースから外れて，自分が作った溝のコースに車を走らせる。C男はその後にくっついて溝のコースで車を走らせながら，D男と同じように溝をさらに深く削るように走らせていく。

“振り向き”による場の共有と承認

交渉を行う事例では，④～⑧で示したように，C男とD男は交互に“振り向き”を行う特徴が見られた。この交互に現れる“振り向き”は，その時間的な差から，C男の“振り向き”に対してD男が見返すといったような，見つめられた者が思わず相手を見返すという性質のものではない。また，C男とD男は互いに背を向け合っており，互いが“振り向き”を行っていることは視覚的に確認することができないこと，二人が砂場の対角線上におり距離が遠いという2つの物理的な条件を考慮すると，⑤のC男がD男に対して行った“振り向き”にD男は気づいていない。⑦の直前の段階になって，D男が次第にC男の方へ接近をはじめたことで，D男の身体がC男の方を向いたために，⑦の“振り向き”の段階でやっとC男が自分（D男）の方に“振り向き”を行っていることを認識したと

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

考えられる。仲間入りを促すような明示的な発話もないにもかかわらず，⑧の身体接触による“振り向き”の直後に，すぐに二人は車で競争するというイメージを共有し，互いに関わりながら遊び始める。この事実は，⑧以前において，C男とD男との間に⑧の“振り向き”後での相互作用について何らかの形で承認が行われたことを示す。

砂上[8]は，幼児が身体を近接させ，一緒に遊ぶことを「場を共有する」と言う言葉で捉えて，「『場を共有する』と言うことは，仲間意識や遊びのイメージという目に見えないものを，身体の具体的な動きという目に見えるものとして共有すること」と述べ，身体的な近接が仲間意識や遊びのイメージの共有化の度合いを表象していることを示唆している。この先行研究の成果を踏まえると，C男が始めた車をコースで走らせる遊びのイメージを，D男が“振り向き”見て真似て，さらに，同じように遊ぶD男をC男が“振り向き”見ることを繰り返すことで，C男とD男の間に仲間意識や遊びのイメージの共有が生み出された。そして，この生み出された仲間意識や遊びのイメージの共有が目に見えるものとして，C男にD男が身体を近接するという形で顕在化し，「場を共有する」という現象が生じたと捉えることができる。すなわち，幼児が行う双方向的な“振り向き”によって，仲間意識や遊びのイメージの共有が促されて，「場を共有する」現象を生み，先に述べた注視と同じように，その後の関わりについて暗黙的な承認を生み出したと考えられるのである。

また，3歳児の砂場付近で相互作用に至らなかった事例について【研究1】で撮影したビデオデータをもとに再度確認を行った。その結果，“振り向き”直後の幼児の遊びの様子が映像で確認できた事例を選定し，相手に関わろうとして接近・交渉を行いながらも，相手から拒否されたり，反応が無かったりと相互作用に至らなかった事例を8件選定した。その8事例では，幼児は“振り向き”直後に注視や，双方向的な“振り向き”を行っていなかった。以上からも，“振り向き”後の注視や双方向的な“振り向き”が，幼児同士のその後の関わりについての暗黙的な承認を生み出す機能を持つことが逆説的に示唆される。

（ウ）接近から相互作用までの過程

次に，注視と接近後から相互作用に至るまでの経過について検討を行う。事例1では，A子はB男と同じ道具をそろえ，接近して傍にしゃがむとB男と同じようにシャベルを持ち，表面の乾いた部分だけを削り取るようにして砂を集め始める。事例2においても，ここでははじめに，D男が⑨「よーいどんしよう」と言う暗黙的な方略による交渉を行っている。その直後にはD男がC男の車の後ろに自分の車を置いて，C男の車を追うようにして，その動きを模倣している。このように接近・交渉の後に，その“振り向き”の要因を生みだした主体者の行為を模倣する様子は全12事例で見られた。そして，このような模倣する活動がしばらく展開したのち，発話による働き掛けが多く行われ始め，相互作用が活性化し，イメージを出し合いながら共同して遊ぶ姿が見られた。

この相互作用へのきっかけの方略として全12件の事例のうち，注視が確認できた8事例においてはすべてが模倣的な方略によるもので，双方向的な“振り向き”の4事例ではすべて暗黙的な方略による交渉が行われた。明示的な方略が用いられることは無かった。この事実は，3歳児の相互作用のきっかけが暗黙的方略，模倣的方略が多いことを示した先行研究[9]や，3歳児の砂遊びにおいて暗黙的な働きかけが多いことを示した先行研究[10]の成果と合致する。

4. 結　論

以上から，“振り向き”から相互作用へと展開する過程について図1にまとめ，以下，結論としてまとめた。

考察から，遊びの中で現れる幼児の“振り向き”は，ただ単にものめずらしい音声や声への

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

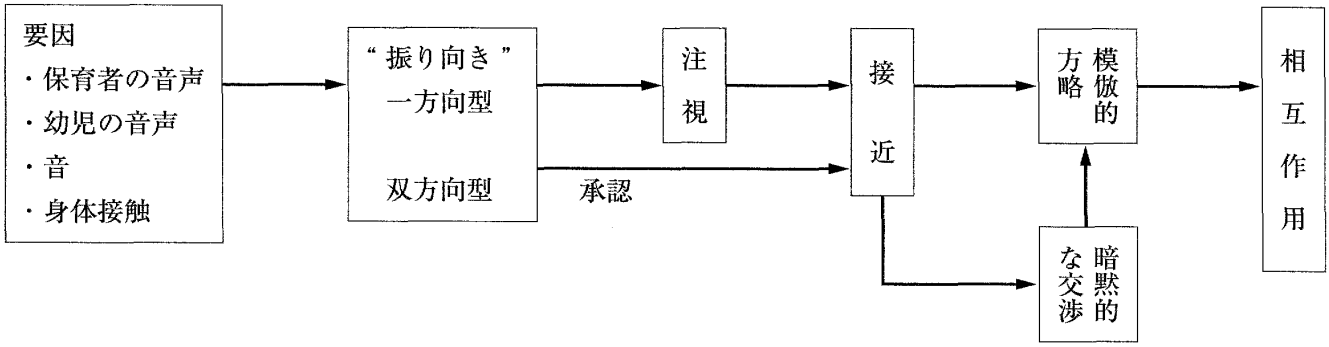

図1　3歳児の“振り向き”から相互作用までの展開過程

反応として行われるのではなく，幼児が仲間と同じ動きや場を共有することで仲間と共同して遊びたいという能動的な心理による欲求を表象した現象として捉えることができる。幼児は，この仲間との相互作用への欲求を“振り向き”という行為を通して発信し，その直後の注視や再度の“振り向き”によって，注視や“振り向き”の対象となる幼児や保育者へと伝わったのかを確認する。そして，その欲求を肯定的に受け止めた幼児や保育者は，その注視に反応しなかったり，逆にその幼児に対して“振り向き”を行ったりすることで，その後に活動を共同的に行うことについて暗黙的に承認を行う。逆に否定的に受け止めた幼児は見返したりすることで，かかわりを拒否する。すなわち，遊びの場面で幼児が見せる“振り向き”のやりとりを把握することは，その空間に共にいる幼児や保育者との間にどのような仲間意識，イメージの共有が保たれているのかを知るための目安のひとつとなると考えられる。

ただし，この“振り向き”という行為は，日常の中で意識的，意図的に行う行為ではなく，どちらかというと突発的，偶発的に表れる行為である。そのため，保育実践において現れる幼児の“振り向き”を正確に把握したり，促したり，保育者が意図的に“振り向き”を行ったりすることを援助の方策の一つとして行うことは難しい。しかし，実際には，保育者は日常で多くの“振り向き”を生み出し，自らも“振り向き”を行っている。本研究でも表4の事例2で示したように，保育者の「わーきれいね」と言う音声が要因となって幼児が“振り向き”，そこから注視，模倣と展開し，複数の幼児が共同して色水遊びを楽しんだ実践が見られた。保育者が自らの保育実践をビデオで撮影し，その動画を元にカンファレンスや省察を行う際に，幼児の“振り向き”に着目することで，その幼児の仲間意識の高まりや関心の度合いなど，幼児の心情への理解を深めることができ有効であると考えられる。

注

（注1）このHPP法は，4か月から12か月の乳児を対象とし，母語や非母語の音韻比較や，声のピッチによる選好の違いなど明らかにした研究で用いられた。
Rachel, A. Hayes, Alan Slater, Elizabeth Brown (2000) *Infants'ability to categorise on the basis of rhyme. Cognitive development*, Volume 15, Issue 4, October-December 2000, 405-419.

引用文献

(1)森　司朗（1999）幼児の「からだ」の共振に関して―対人関係的自己の観点から―．保育学研究 第37巻第2号．24-30
(2)塚崎京子・無藤　隆（2004）保育現場における3歳児の身体接触の変容．乳幼児教育学研究 第13号．13-25
(3)榎沢良彦（1997）園生活における身体の在り方―主体的身体の視座からの子どもと保育者

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

の行動の考察．保育学研究35巻第２号．38-45

(4)Fernand, A.（1985）. *Four-month-olds prefer to listen to motherese*. Infant Behavior and Development, 8, 181-195.

(5)Kelmer Nelson, D. G., Jusczyk, P. W., Mandel, D. R. et al.（1995）. *The head Turn preference procedure for testing auditory perception. Infant Behavior and Development*. 18, 111-116.

(6)松井愛奈・無藤　隆・門山　睦（2001）幼児の仲間との相互作用のきっかけ：幼稚園における自由遊び場面の検討．発達心理学研究 第12巻第３号．195-205

(7)野村雅一（1985）日常動作の構造とコミュニケーション．文化人類学 第１巻第１号．アカデミア出版会．23-32

(8)砂上史子・無藤　隆（2002）幼児の遊びにおける場の共有と身体の動き．保育学研究 第40巻第１号．64-74

(9)前掲(6)

(10)松井愛奈（2001）幼児の働きかけと遊び場面との関連．教育心理学研究 第49巻第３号．285-294

謝辞

本研究の実施にあたり，ご協力いただきました保育園の子どもたち，先生方に感謝申し上げます。

付記

本稿はその一部を日本保育学会第63回大会（2010年）において発表した。

NII-Electronic Library Service